

科学あるいはミュートス

——プラトン『ティマイオス』における「ありそうな話」

松 井 貴 英

序

科学とは何か、科学的探究とはどのようなものか、という問題を脇へ置いて、哲学における科学に関わる探究の歴史を概観してみると、タレス以降のミレトス派から、原子論者デモクリトス、そしてプラトンやアリストテレス等の古代ギリシアの哲学者、近代の科学へと道を拓いていったデカルトやライブニッツ等のように、実際に科学的な、あるいは自然を対象とした、探究を行った哲学者もいるし、たとえば、プラトン『ティマイオス』やエウクレイデス『原論』等に関する注釈をしたプロクロス、現代における Whitehead や Kuhn や Popper や Hacking 等は、科学という営みを探究の対象とした哲学者や科学史家もいる。では、科学とは何であり、科学的探究とはどのようなものかという問題を考慮に入れるとしたら、彼らによる自然を対象とした探究は、それぞれ、いかなるものであるといえるだろうか。

本論文では、哲学における科学的探究（あるいは自然学的探究といったほうが適切であろうか）の中でも、特に、古代ギリシアの哲学者プラトンが『ティマイオス』において記述した宇宙創成のミュートスに関して、それを科学という営みとして捉えることを前提とした上で、この対話篇の中で展開される宇宙モデルを「ありそうな話 (eikos muthos エイコース・ミュートス)」としてプラトンが記述していることについての考察を行う。「ありそうな話」として宇

宙論を構築することが、科学的な探究、あるいは自然学的探究であるとするならば、どのような意味のあるものであり、どのような評価がなされるものであるかを探ることを目指す。具体的には、科学という営みを探究の対象とした、科学的営みの外側からの探究の幾つかを紹介しつつ、それらに対しても考察を行いつつ、その上で、ミュートスとして述べられるモデルの探究の方向性について考えていくことになる。本論文では、プラトンにおいては、これらは同じであるのか、あるいは同じではないが同等であるのか、それとも単に関係があると言えるだけなのか、そもそも無関係なのかが、問題となる。本論文における考察は、プラトンにおける知的探究とミュートスの関係、あるいは、プラトンがミュートスとして何らかのモデルを記述することに関する問題を探る端緒となるものである。さらには、科学的探究において反証可能であることと、蓋然的正しさのレベルにあることと、仮設の前提（に基づいた探究）のレベルにあることの関係を、探るための端緒ともなりうるものでなる。

1. 科学的であるということについて

この問題を扱うにあたり、まず、科学的探究という営みが、哲学者や科学史家らにより、どのように解されてきているかを概観しておこう。そのために、科学的探究の歴史を辿る必要があるとすれば、たとえば、ガリレイが死去し、ニュートンが生誕した年である1642年がひとつの転換点であると解される場合がある¹ことを考慮する必要があるかもしれない。Whitehead は、科学的探究を行う際に実験を重視するフランシス・ベーコンやガリレオ・ガリレイの態度に、近代以降における科学的探究の方法の萌芽を見出す。また、彼らのような優れた学者が多く現れた17世紀を、特別な時代であったとする。そして、1642年以前と以後の、近代以前と近代以後での科学的探究の方法の違いを、アリス

1 Whitehead, *Essays in Science and Philosophy*, p.166

トテレス主義的な文献参照的な探究と、実験結果に基づいた探究というアプローチの違いであるとしつつ、近代以後の探究の方法を、進歩した探究の方法であるとする²。この年が近代科学を語る上で決して避けることのできない重大な一年であるかどうかはともかく、この年を含む17世紀は、近代以降の科学にとって、大きな世紀であったことはたしかである。17世紀は、前半におけるガリレイ、後半におけるニュートンの活躍だけでなく、イングランドにおけるアカデミーの成立、その中心的人物であったベーコンやロバート・ボイルらによる、実験に基づいた科学的探究や情報の共有という現代にも通じる実験科学の方法の模索、フランスにおけるデカルトの活躍など、それまでの自然に対する探究の態度とは異なる方法で探究を行った者たちが現れた時代であった。

もし、人類の歴史において、近代科学の以前と以後の転換点となる時点を探ることが科学という営みについて考察する際に意味のあることであるとすれば、このように、ある年（あるいは、もし可能であれば、ある月、ある日、ある時間）を特定する必要があるかもしれないが、それは適切な方法ではないだろう。転換点となるようなある時点の前後で科学的探究の方法や科学において正しいとされる概念や知識が劇的に転回されること、すなわち、ある日ある時に科学的な大発見がなされ、それに基づいた概念や知識が新しい正しい知識としてまたたく間に人々に正しく受け容れられ、それまで正しいと思われていた知識が、ある日を境に古い誤った知識であるとして捨て去られるといったようなことは、おそらくは、現実には起こり得ないだろう。科学は、大雑把な言い方をすれば、醸成されるように徐々に形成され、そして徐々に人々に受け容れられるもので

2 Whitehead は、後に Kuhn が提示するパラダイムのような概念を用いるといった発想はなかった。とはいえ、科学的探究の進歩を意識している点で、そして、実験というものを重視している点で、科学的探究において、Latour が提示するような作成過程の状態があることについて、明示してはいないが、そのような概念へ繋がりをものを含んでいるようにも思える（尤も、Whitehead が科学の作成過程の段階を意識していたかどうかは、わからないが）。しかし、本論文においては、この点についての検討は行わない。

あるということもできよう³。とはいえ、もちろん、科学という営みの歴史は、全体として連続した探究の繋がりによって形作られるものではない。それぞれの科学概念や探究の際に基盤となる考え方は、相反するものであればなおさら、それらは相矛盾するものであるのだから、累積的でないことは確かである⁴。

また、そのようなそれぞれが独立したものである科学概念や探究の際に基盤となる考え方は、普遍的な真理ではなく、反証可能なものであることについても、意識しておかなければならないだろう。Popper における反証可能性の議論では、「帰納的諸科学」においては、経験によって実証される個別的な言明から（普遍言明たる）理論を推論するような帰納というものとは存在しない、すなわち、理論は決して経験的に実証できないのであり、経験的科学体系にとっては、反駁されうるということが可能でなければならぬとされる⁵。この Popper の議論に従えば、科学概念は、ある体系が経験によってテストできる場合にだけそれを経験的または科学的なものとはっきり認められるであろう⁶。そうであるとすれば、科学概念は、それが経験的に構築されたものであるなら、蓋然的な正しさのレベルを、あるいは、仮設的なもののレベルを超えることは

3 科学的な発見といったものが世の中に受容されていく過程を、その発見について書かれた書籍が誰にどのように読まれたかを探るという方法によって、辿ることも可能であろう。たとえば、コペルニクスが『天体の回転について』を著した後、太陽中心の宇宙モデルがどのように広まっていったのかを、具体的には、コペルニクスのこの著作が、ジョルダノー・ブルーノ、ティコ・ブラーエ、ガリレオ・ガリレイ等、誰の手に渡りどのように読まれ理解されたのかを、歴史的にあるいは書誌学的に辿った、Gingerich, *The Book Nobody Read* は、この点に関して、有益な示唆を与えてくれる。

4 ここで想定しているのは、Kuhn による「パラダイム」のことである。（*The Structure of Scientific Revolutions*, pp.2-3, pp.10-11）

5 Popper, *The Logic of Scientific Discovery*, p.18. だからといって、いわゆる「創造科学」のような擬似科学とされるものについても、科学の枠組みの中に組み込んでよいわけではないだろう（Popper は、この箇所では、もちろん、このことに言及してはいないが）。とはいえ、本論文では、このような問題は扱わない。

6 Popper, p.18

できないものであるということにもなると解されうるかもしれない。

ここまでの議論は、程度の差こそあれ、出来上がった科学理論や概念のみを扱っているといえよう⁷。このことは、すなわち、科学理論というものはおよそ出来上がったあるいは既成の科学であるという前提に立っているということでもある。しかし、科学における何らかの法則やモデルは、突如として現れるものでもなければ、ある日突然何らかの拍子で作りに出されるものでもなく、自然に関する探究の中で作りに出されるものであろう。それゆえ、科学には、探究の成果であるといえる、出来上がった科学理論や概念(いわゆる既成の科学)と、そのような既成の科学となる前の段階、すなわち、科学的探究が現在進行中であるという状態の科学(いわゆる、作成過程の科学)⁸という、ふたつの側面があるといえよう。この作成過程の科学は、それを研究している科学者自身にとって、「十分ということは決してない」ものであるということになるだろう⁹。この議論に従えば、もしかしたら、単に完成された科学のみを対象とし、「仮説-演繹」的な手法で探究が行われる科学と、実験によって集められたデータから科学理論を作り出していくという手法で探究が行われる科学という、ありきたりな言い方をすれば、演繹的な手法か、それとも帰納的な手法かという、二分法的に振り分ける科学観によって仕切られた枠組みの中にいかなる科学的営みをも収納しようとするのは、必ずしも適切なことではなく、既成のものであるか、作成過程のものであるか、という違いを基準にして科学的探究を捉えることの妥当性を意識する必要もあるかもしれない。

また、ヨーロッパにおける近代科学の発展には、数量化により世界を記述するという方法が大きく寄与したことを考慮しておいた方がよいかもしれない。

7 Latour の表現に従えば、既成の科学 (ready made science) といえよう (*Science in Action*, p.4)。また、「程度の差こそあれ」としたのは、Popper の述べるように科学における反証可能性を考慮すれば、科学は完全無欠のものとして完成されることはないからである。

8 Latour, p.4

9 Latour, p.13

コペルニクスが自身の宇宙モデルに関して、数学によって自分の論理によって表現し、そのことが空間そのものの量と質について新たな概念を提示したことは、その一例であるともいえるだろう¹⁰。

加えて、「自然」に対する評価の違いにも考慮しなければならないだろう¹¹。現代においても、次のような違いがある。Kuhn は、通常科学(normal science)¹²における科学者の仕事は、パラダイムが支えるお仕着せの、かなり融通の利かない鑄型に自然をはめ込む試みであるとする¹³。それに対して、Latour は、既成の科学 (ready made science) においては、「正しく事実をまっすぐに得よ」という格率¹⁴で表現しているように、また「勝つために正しく自然を見なければならぬ」¹⁵と述べているように、自然を重視していると考えられる¹⁶。

ここまでで概観してきたように、「科学とは何か」という問いに対して、簡潔に言い当てることができるような、一般的な答えがあるというわけではなさそうである。科学とは自然的事物についての探究であるとする答えでさえ、科学的探究における自然の位置づけに関する Kuhn と Latour の立場の違いを見ても明らかのように、その意味は異なってくるようにも思われる。もちろん、自然に対して形而上学的な探究を行ってきた哲学者は、古代ギリシア以来、枚挙にいとまがないのであり、自然をどのような視点あるいは探究のレベルや方

10 Crosby, *The Measure of Reality*, pp.104-105

11 この観点は、Hacking による。(Historical Ontology, pp.16-17)

12 Kuhn における通常科学と Latour における既成の科学は、両者の科学観（あるいは科学のモデル化の手法）が異なるが故、まったく同じものであるとはいえないだろうが、出来上がった科学という点においては、同等のものと考えてよいかもしれない。

13 Kuhn, p.24

14 Latour, p.7

15 Latour, p.94

16 Hacking は、両者の「自然」に対する評価に関して、Kuhn は「自然」を軽視しているのに対し、Latour はむしろ逆に自然に対して過大な行為者性を付与している立場であるようだとする。(p.17)

法で考察の対象とするかによっても、その意味は異なってくる。それゆえ、そのことから、これが適切な答えであるとはいえないだろう。その上、自然に対する探究が宗教と一体となっていた時代を考慮すれば、なおのことその意味は異なってくることであろう¹⁷。たとえば、ニュートンは、生物の腐敗に着目し、そこから生長をつかさどる精 (spiritus) という概念を用いて、物質の窮極的単一性を説明しようとしていた¹⁸、その後、万事が神の意志であるとする秘跡主義的な見地を持ちつつ天界と地上界の両方に関わる世界像の構築を目指し神の創造性をも研究していた¹⁹。ニュートンが自然的事物を探究の対象としていたことは確かであるが、ニュートンのこの手法を、現代の物理学的に構築された世界像を基盤とした科学的視点に基づいて評価するならば、自然的事物についての探究ではあるけれども、18世紀後半に、神の監督を必要としない自然法則の規則的で機械的な作用が注目されるようになっていくにしたがって、ニュートンが保持していた秘跡主義的な思想が切りつめられ消し去られていったように²⁰、現代においても、肯定的な評価は与えられないかもしれない。

このような考察を踏まえつつ、科学的探究とはどのようなものであるかを考える際に、以下のことが有益な示唆を与えてくれるといえよう。まずは、Hacking がフーコーによる科学における六つの仮説として挙げているうちの第一のもの、「未熟な科学においても明確な秩序が存在する。ただ、そうした秩序は仮説-演繹モデルとは無関係なものだ」というものである²¹。もうひとつは、たとえば、機械仕掛けモデルによって、デカルトが動物の創造全体を、ボイル

17 Brooke によるニュートンに関する指摘 (*Science and Religion*, p.7) や、科学と宗教を分離させようとするものの作為性や、科学と宗教の相互作用が近代科学の黎明期において活躍したフランシス・ベーコンや、デカルト、ニュートンにおいても見出されることに関する指摘 (pp.16-22) 等は、妥当なものであろう。

18 ドップズ『錬金術師ニュートン』34-37頁

19 ドップズ、304-306頁

20 ドップズ、306頁

21 Hacking, p.95

が機械仕掛けモデルで自然界を説明したことである²²。これらの点を踏まえるならば、科学的探究の中には、それが未熟なものであるとしても、そこには明確な秩序が存在すること、そして、説明の方法の中には、モデル化による説明、いわば「なぞらえ」による説明によるものがあるということであろう。

もしこのように考えることが無理筋なものでなければ、プラトンが『ティマイオス』において記述している「ありそうな話（エイコース・ミュートス）」としての宇宙モデルは、それがたとえ未熟なものであるとしても、そこに明確な秩序が存在しているのであれば、科学的探究のひとつのかたちであるということになるといえるかもしれない（もちろん、明確な秩序があるからといって、それを持つものの全てを科学と呼べるわけではないけれども）。反対に、もし上記のように考えることを認めないとすれば、プラトンの宇宙モデルが科学的探究のひとつのかたちであるということを認めないということになるかもしれない。

2. 『ティマイオス』における宇宙論が語られるための前提

プラトンは、『ティマイオス』²³において、宇宙創成をミュートスとして語る。宇宙創成のミュートスを語るティマイオスは、その冒頭で「できるだけ完全に示すことができますように」（27d）²⁴と述べた上で、次のように宇宙創成の

22 Brooke, p.118, pp.127-135 デカルトは人類が永遠の生命すなわち不死の靈魂を持っていることを証拠立てるために、ボイルは神のこしらえた「規則の体系」こそが神の活動の証であり自然法則は神の選んだ行動様式のひとつの表現に過ぎないことを示すために、このような説明を行った。

23 プラトン『ティマイオス』は、『国家』において理想国家のあり方が述べられた翌日が設定場面となっており、そこでティマイオスによって宇宙創成のミュートスが独白のように語られるという対話篇である。『国家』に続いているという場面設定は、『ティマイオス』がどのような位置づけとして構想されたかを解釈する上で、重要な要素となるだろう。

ミュートスの前提を述べる。宇宙は常に存在し続けるものではなく生成消滅するものである(27d-28c)。そして、第一の区別として、常に有るものすなわち生成しないものと、常に生成していて有ることの決してないものの区別があり、また、常に同一を保つもので理性の働きによって言論の助けを借りて把握されるもの、思わくによって言論抜き感覚の助けを借りて思いなされるものが区別される²⁵(27d-28a)。その上で、宇宙は生成したものであるとされる(28b)。その理由は、感覚されるもの、感覚の助けを借りて捉えられるものは、生成するもの、生み出されるものであることは既に明らかにされたことだからである(28b-c)。そして、宇宙の制作者は、常に有るものをモデルとして、宇宙を制作したとされる(28c-29a)。

このような発言を経て、言論の対象が永続性のある確固とした理性を頼りに明らかにされるものである場合には、言論自身も永続性のある不変のものであるが、言論の対象が似像でしかない場合には、言論自身も「似た(ありそうな、真実らしい、エイコース)」言論でしかないとされる(29b-c)。そして、ティマイオスは、ソクラテスに対して、このような問題については、ただありそうな物語を受け容れるにとどめ、それ以上は何も求めないのがふさわしい、有りそうな言論を我々が与えることができるなら、それでよしとしなければならぬと述べ(29d)、ソクラテスはこのことに了解する。

このような前提が述べられた後に、「ありそうな話」として、宇宙に関してティマイオスによって述べられていくことになる。もちろん、プラトンが「ありそうな話」とであると断った上で展開する宇宙モデルは、たしかに未熟(現代

24 訳については、基本的には、『プラトン全集』第12巻「ティマイオス」の種山恭子訳を参照する。

25 この箇所には解釈上の問題がある。それは、「思考によって把握されるもの」は「常に同一を保つもの」であることと、「思いなされるもの」は「生成消滅して、あることの決してないもの」であることに関して、それぞれ前者が後者の定義となっているか、後者が前者であること理由となっているか、どちらの解釈が適切かというものである。しかし、本論文では、この問題は扱わない。

の宇宙科学からみれば正しくないもの)ではあるが、たとえば、天体の回転や要素三角形を用いた物質の構成の説明について、プラトンが、天体の回転については理性による、要素三角形については理性と必然による説明を行っている²⁶点などから、そこに明確な秩序の存在を読み取ることはできる。とはいえ、プラトンの宇宙創成のミュートスは、現代における科学とは異質なものであることも確かなことである。それゆえ、「ありそうな話」をどのような「ミュートス」であると解すべきかが問題となってくるであろう。すなわち、プラトンが『ティマイオス』において「ミュートス」をどのようなものであるとしているかという問題である。

3. 「ありそうな話 (エイコース・ミュートス)」

「ありそうな話」(eikos muthos)²⁷に関して、Cornford²⁸は、次のように解する。「ありそうな」(eikos)については、『ティマイオス』における宇宙論は詩(poetry)であり、それは他の幾つかの宇宙論よりもより真実をもたらしことに近いイメージであるが、この対話篇が接近しうる正しさは、近代科学が夢見ているような「自然法則 (physical law)」についての正確で文字通りの言明ではないとする²⁹。また、プラトンにおける真実在はアイデアであり、我々が感覚する物体はアイデアによって構築されたものではないし、それらの中にアイデアはない(52b-c)とされる箇所から、プラトンが一般的に物質と呼ばれるものの実在性を否定すること、プラトンにとって世界全体は像(image)であり実体ではないことに言及する³⁰。

26 この説明の導入時に、「ありそうな話」についての再確認が行われる。(48d)

27 eikos muthos について、Zeyl (*Plato Complete Works*)は likely tale と、Cornford (*Plato's Cosmology*)は likely story と、Vlastos (*Plato's Universe*)は likely tale, likely account としている。

28 Cornford, *Plato's Cosmology*, pp.28-33

29 Cornford, p.30

Cornford は、『ティマイオス』が「話」(muthos) であることについては、以下のふたつの意味があるとする。第一には、どのような物質世界の説明も、変化しない真実³¹についての正確で自己調和した (self-consistent) 言明に帰し得ないことであり、第二には、宇宙論が宇宙創成という形で役回りを与えられていることである。また、Cornford は、プラトンは宇宙を、分析により断片化することによってではなく、我々の眼の前でそれを構成したり育てたりすることによって、説明することを選択した点にも言及する。³²

たしかに、Cornford が述べるように、プラトンは、イデアのような実在性を物質的存在に対しては認めない。そして、このことに関しては『ティマイオス』においても保持されていると解することは妥当であろう。しかし、Cornford が解するように、プラトンが宇宙創成のミュートスを詩と同等のものとしていたかは疑問である。種山はこの点に関して、Cornford の解釈では、「我々は、所詮は人間でしかない」(29d) と述べられる箇所を適切に説明できないとする。そして、宇宙がミュートスとして語られることに関して、この宇宙なる現実存在が(われわれの描く宇宙像は虚妄かもしれないが)、知的な力によって配置づけられていることが、プラトンにとって大前提となっているとした上で、「我々は、所詮は人間でしかない」(29d) ことについて、「理性の対象」をモデルとしてこの宇宙を製作した神ならば、この宇宙の構造についての真実を語りうるだろうが、我々は人間でしかなく、その真相を十全に把握することはできないし、宇宙として捉えられているこの存在は、どこまでも感覚を通じ広がりを持つものとしてしか捕らえられず、純粹に「理性の対象」を対象とする言論のような、厳密で整合的で不変のものを与えることはできない——ことが示されていると解する³³。この種山の解釈は妥当だろう。

30 Cornford, p.31

31 イデアのことである。

32 Cornford, p.31

33 『プラトン全集』第12巻における『ティマイオス』解説、279-280頁

とはいえ、種山は「十全に把握することはできない」「厳密で整合的で不変のものを与えることはできない」と述べ、人間の宇宙の真相への到達の可能性を、肯定的には解していないように思われる。この点に関しては疑問が残る。それに対して、Vlastos は、次のように解する。宇宙創成のミュートスを語るティマイオスは、宇宙についての自分の説明は知識ではなく、単に「ありそうな話」あるいは「ありそうな説明」であるような、単なる思わくであると主張することに、Vlastos は言及した上で、プラトンが我々に示しているものを、プラトンは真実でありうるかもしれない何か——としての「信頼できる」ものであると考えていると解する³⁴。そして、プラトンが、自身の自然に関する理論を *eikos* であると述べることによって彼が意味しうることの全ては、それを信じることに不利になるような説得力のある理由は何もないということであるとする³⁵。

Cornford や種山に比べて、Vlastos は、*eikos* に積極的かつ肯定的な意味づけを行っているように思われる。Vlastos の解釈に従えば、人間は「ありそうな説明」ではあるけれども、真実でありうるかもしれない何かとしての「信頼できる」ものとしての「*eikos muthos*」を語ることができると、プラトンが考えていたと解することもできるだろう。Vlastos の解釈のようにプラトンが「ありそうな話」を肯定的に考えていたとすることは妥当であろうか。

4. 理想としての「ありそうな話」

『ティマイオス』は『国家』における対話の翌日が場面設定となっている。そのため、対話篇の冒頭で、『国家』において語られた理想国家に関する概要が述べられた後、ティマイオスの一人語りの形で、「ありそうな話」として、宇宙創成のミュートスが語られるという設定になっている。

34 Vlastos, *Plato's Universe*, p.93

35 Vlastos, p.93 n.40

プラトンの対話篇の冒頭については、Burnyeat が解するように、単なる文学的装飾ではなく、対話篇の冒頭は、著作の本質的な哲学的内容に対する関係や関連の中にもたらされるものであるといえるだろうし³⁶、対話篇の最初の言葉は当該対話篇において議論されるテーマや内容を暗示しているともいえよう³⁷。このことを踏まえつつ、冒頭の言葉のみでなく冒頭における対話篇の導入箇所に対話に関しても同様のことが言えると拡大解釈することが無理筋でないとするれば、『ティマイオス』冒頭で述べられる『国家』において語られた理想国家に関する概略は、『ティマイオス』における宇宙創成のミュートスを解釈する際の何らかの暗示をもたらすものであると解することもできよう。

その可能性のひとつが、『国家』において理想国家が語られたことの補足として、あるいは不足を補うものとして、あるいは内容において関連するものとして、『ティマイオス』において宇宙創成のミュートスが語られたとする解釈であろう。その他の可能性としては、『国家』において理想国家が語られたように、『ティマイオス』において宇宙創成のミュートスが、理想の宇宙モデルとして語られたとする解釈であろう³⁸。

そして、前者の解釈に関してはさておき、もし後者の解釈を採用するならば、プラトンは『ティマイオス』で展開している宇宙論を、ある程度のレベルで(『国家』において語られた理想国家と比較して、どの程度の理想であるといえるかは解釈の余地があるが)、宇宙(の創成)についての理想的な、あるいは、あ

36 Burnyeat, *First Words*, pp.3-4

37 松井「メノンの最初の問い」36頁

38 この解釈に関しては、本論文では「ありそうな解釈」として、このような解釈の可能性があることを述べるにとどめているが、理想国家が語られる『国家』と、未完の対話篇ながら、過去に理想的な国家として繁栄した望ましい国について述べられた『クリティアス』に挟まれたかたちで展開される『ティマイオス』が、プラトンによる何らかの理想的なあり方の表明の対話篇であると解する可能性を認める解釈が無理筋でないことを論ずる必要があることは確かであるが、それは今後の課題となろう。

るべき姿として述べていると考えることも、もしかしたら可能かもしれない。もちろん、このように解することが妥当であるとするためには、多くの問題を乗り越えないといけないだろう。とはいえ、このような解釈が可能であるとするれば、Vlastos のように、「ありそうな話」は、プラトンは真実でありうるかもしれない何かとしての「信頼できる」説明であると考えていると解釈することも、可能であるように思われる。

5. まとめ

科学的探究をひとことで言い当てることは困難なことではあるが、少なくとも、科学的探究の中には、もちろんそれが条件の全てではないし、これが必要条件であるというわけでもないが、たとえ探究の方法や内容が未熟なものであるとしても、そこに明確な秩序が存在し、説明の方法の中には、モデル化による説明があると解することは、妥当なことであるように思われる。このことを踏まえつつ、プラトン『ティマイオス』における宇宙創成のミュートスを科学的探究のひとつであると解釈した場合に、宇宙に関しての説明が「ありそうな話」として語られてはいるけれども、それはプラトンにとって、真実でありうるかもしれない何かとしての「信頼できる」説明であると解する可能性を認めることが無理筋ではないことも可能かもしれないことが述べられた。とはいえ、このような解釈の可能性については、この解釈が妥当なものであるかどうかを示すことも含め、更なる検討が必要であろう。その意味で、本論文で述べられたことは、展開される議論の整合性を認めたならば、その解釈を肯定的に受け容れることのできる、「ありそうな話」であるということもできるだろう。

参考文献

- John Hedley Brooke, *Science and Religion: Some Historical Perspectives*, Cambridge, 1991
(邦訳:『科学と宗教 合理的自然観のパラドクス』工作舎、2005年)
- Miles Burnyeat, *First Words, Proceedings of the Cambridge Philosophical Society*, 43, 1997,
pp.1-20
- John M. Cooper (ed), *Plato Complete Works*, Hackett, 1997
- F. M. Cornford, *Plato's Cosmology: The Timaeus of Plato*, Hackett, 1937
- Alfred W. Crosby, *The Measure of Reality: Quantification and Western Society, 1250-1600*,
Cambridge, 1997 (邦訳:『数量化革命 ヨーロッパ覇権をもたらした世界観の誕生』紀伊國屋書店、2003年)
- Owen Gingerich, *The Book Nobody Read: Chasing the Revolutions of Nicolaus Copernicus*,
Arrow Books, 2005 (first published by Walker Publishing Company, 2004)(邦訳:『誰も
も読まなかったコペルニクス 科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』
早川書房、2005年)
- Ian Hacking, *Historical Ontology*, Harvard University Press, 2002 (邦訳:『知の歴史学』
岩波書店、2012年)
- Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, University of Chicago Press, 1962
(邦訳:『科学革命の構造』みすず書房、1971年)
- Bruno Latour, *Science in Action*, Open University Press, 1987 (邦訳:『科学が作られて
いるとき 人類学的考察』産業図書、1999年)
- Karl R. Popper, *The Logic of Scientific Discovery*, Routledge, 1992 (first English version
published by Hutchinson, 1959)(邦訳:『科学的発見の論理』(上・下) 恒星社恒星
閣、上巻、1971年、下巻1972年)
- Gregory Vlastos, *Plato's Universe*, Parmenides Publishing, 2005 (original: the University of
Washington Press, 1975)
- Alfred North Whitehead, *Essays in Science and Philosophy*, Rider and Company, 1948 (邦
訳:『科学・哲学論集』(上・下)『ホホワイトヘッド著作集』第14巻・第15巻、松
籙社、上巻1987年、下巻1989年)
- プラトン『ティマイオス』(種山恭子訳)、『プラトン全集』第12巻、岩波書店、1975
年
- B.J.T.ドップズ『錬金術師ニュートン』(大谷隆昶訳) みすず書房、2000年
- 松井貴英「メノンの最初の問い」『教養研究』第19巻 第2号、2012年、23-37頁